

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

SER no.068; はじめに

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 横川, 公子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/1963

I. はじめに

横川 公子

1 共同研究と民博所蔵大村しげコレクション

本書は、国立民族学博物館における共同研究「モノに見る生活文化とその時代に関する研究——国立民族学博物館所蔵の大村しげコレクションを通して——」（2002～4年度・代表横川公子）の報告書である。国立民族学博物館所蔵大村しげコレクションとは、随筆家大村しげ（本名 大村重子 1918年～1999年）がバリ島で亡くなられた後、京都市中京区の姉小路の家に遺されたものの一切が、彼女の意志に従って国立民族学博物館に寄贈されたものを指す。2005（平成17）年3月、民博所蔵大村しげコレクションの調査は、本共同研究会のメンバーによって一応終了した。本書は、その調査報告と共同研究会メンバーによるコレクションの内容を捩りどころとする知見を収録したものである。

コレクションは、元の所有者、大村しげの居住場所であった京都市中京区寺町姉小路東入りの借家に遺されていたもので構成される。当コレクションには、彼女と父母（一部は祖母のものと思われる）によって生涯にわたって使われたもののほとんどすべてが含まれる。いろいろな日用品や儀礼の道具からゴミに見紛うものや空き缶や漬物用の石にいたる、すべてのものである。他に、家業であった仕出し屋や魚屋の道具類が揃っている。コレクションに含まれるものの数量は、調査によって、14,542件、45,218点にのぼることが判明している。

2 共同研究立ち上げまでの経緯と共同研究の目的

本共同研究「ものに見る生活文化とその時代に関する研究——国立民族学博物館所蔵の大村しげコレクションを通して——」（以下、共同研究と称する）は、2001（平成13）年5月、国立民族学博物館に収蔵された大村しげコレクション（以下、コレクションと称する）を対象として、その全容を把握することを目的として立ち上げられた。なおコレクションの当博物館への収蔵までの経緯については、別に記述している。

コレクションの調査は、本共同研究の立ち上げ以前、2000（平成12）年のコレクション収蔵の直後から、収集を担当した笹原亮二によって着手され、調査協力者として、田口理恵が染織品に限定して調査を進めていた。2002年度当初には、生活用品、約1800件と染織品の大部分が明らかにされていた。こうした経緯を引き継いで、本共

同研究が改めて立ち上げられた。

共同研究会のメンバーは、当面の課題として、収蔵されたものの調査を完成させることを目的として構成されると同時に、日常生活全般にわたる生活用品を同定し評価する必要上、ものに関する多方面の専門家や生活用品に関する調査経験者で構成された。生活用品は、衣食住を中核として、生活の多面的な局面にかかわる機能と様相を呈することから、生活学や食文化論、建築学、服装史、文化史、技術史、民俗学、民族学、考古学などの専門家で構成された。当初の調査担当者、笹原・田口両氏に加え、相川佳予子、磯映美、大塚滋、奥村彪生、角野幸博、熊倉功夫、栗田靖之、佐藤浩司、林八千木、藤井龍彦、森理恵、山口昌伴及び筆者とでプロジェクトチームが立ち上げられた。さらに2004年度には、ものから情報を読み取るための方法的なアドバイスをしていただくために、文化資源学に造詣の深い佐藤健二、井上雅人両氏の参加を得た。このうち、実際のコレクションの調査には、その終了までには多少の出入りはあったものの、相川、磯、林、森、横川の5人があたった。相川・林両氏は、2004年度に調査を一応完了したのち、引き続き2005年度も、染織・衣類資料を見直し、主に名称の再確認をした。

コレクションの調査は、まず、ものの全容を明らかにすることが目的とされた。ものはすでに生活の現場を離れ、在り処を記したダンボールに入れて博物館に運び込まれていた。そのため調査では、ダンボールの山の一端から無作為に抜き取ったものを個別に解体して、博物館収蔵のための資料化が行われた。それと同時に、ほぼ毎回の共同研究会で調査の中間報告が行われ、コレクションの内容の周知を図った。一方、各研究者の問題意識によって、ものから生活文化を読み取ることが試行された。

コレクションの調査は先述したように、2005（平成17）年3月、見直しと再確認を終え、ひとまず終了した。但し、コレクションを拠り所とする本格的な研究の取り組みについては、緒についたところであるといった方がよい。というのもコレクションの全体像は、コレクションの民博への搬入やその後の調査の進め方によって、調査終了時まで捉えられないという事情があったからである。そのため、コレクションを拠り所とする本格的な研究については、実は今から始まるのだといっても過言ではないだろう。もちろん、研究者の問題意識によって、コレクションを拠り所とする、さらに独自の調査の可能性が開かれるものであることはいうまでもない。また本書に掲載した報告は、コレクション調査の過程で生じた課題について、能う限り調査結果を参照して行われたことというまでもない。

改めて本研究の目的を述べると、まずコレクションのすべての内容を調査し、データにすること、さらにコレクションを対象として、大村しげの生活様式と人生や価値意識を再現・理解し、コレクションの社会的・文化的機能を探ることにあった。

人が毎日の暮らしのなかで生涯にわたって集積した「もの」には、その人間の人生

が凝縮されている。われわれの毎日の暮らしは、古典的に生活要素とされるものの衣食住に関するもののみならず、暮らしていく上で必要とするすべてのものの悉皆調査において、「もの」に凝縮される家庭生活の機能を13領域に想定した生活財の研究¹⁾に示唆されるように、暮らしを営み、保持していく上で必要とする、あらゆる種類のものを含み込んでいる。そのような「もの」の悉皆調査によって、総体としての生活の再現が可能になると考えられた。従って、あらかじめ何らかの生活像や20世紀という時代像が前提としてあり、調査は、それを検証しようとする過程であるとする設定ではない。むしろ反対に、「もの」そのものの調査を通して、生活文化と時代が示されるべき対象となり、そのうえで、多様で具体的な課題がいかに設定できるのかということが、われわれの基本的な課題であり、調査の大前提にあった。

そういう意味で、生涯にわたって集積されたほとんどすべてのものを含むコレクションは、われわれにとって、この上ないフィールドと思われた。また同時代の「もの」の悉皆調査のうち、具体的にもの一つひとつを調査検討することで関連する情報を明文化した報告はほとんどなく²⁾、当調査の報告は得難い成果になるものと期待された。

3 コレクション調査の前提

次に、共同研究を進める上で共有された、いくつかの前提的な「もの」に関する理解について紹介しておきたい。本研究の題目において、「もの」と「生活文化とその時代」という対概念を提示する理由は、ものを通して見えてくる「暮らしと人間像」とは重ならない「本質的にものであること」の存在について、すでにわれわれが了解しているからだと思われる。そうした了解によれば、ものと人間像は関係を持たない限り、相互に自由な存在としてある。しかし、ものが、ものとして人間に役立つということを出発点とする限り、既に「もの」は単なるものではなく、人間化した存在であり、ものの生きた実在だといってもよい。このようなものと人間像との対立関係、あるいは浸食し合う関係が、我々の生活の現実であり、ものを通して人間像を明らかにするというのもうひとつの前提となっている。別の言い方をすれば、我々が問題にするのは、もの自体としての実証性を確かめるばかりでなく、主にもに關わるコミュニケーションや価値の側面を明らかにしていくことであると考えられた。

さらにコレクションは、大村しげの暮らしの中で使われたという点で、独自に機能的な分析が可能なるものである。このことは、大村しげの著述によって確かめられる。彼女は、ものを媒介として、家族への帰属感を温めている。祖母から母を通して伝えられたものに、かれらの気持ちや暮らし方を重ね合わせている。さらに実際に使っている現場から、ものの機能と能率と味わいを評価し、それを著述で表明する。そのた

め、必ずしも一般化はできないが、大村しげに独自のものの生活的機能を見ることが可能と考えられる。また、コレクションの元の住まいにおける在り処、つまりものの置き場所は、それらのものの用途がどのような使い方や暮らし方・住まい方と関係するのかについて、様々な暮らしのドラマを示してくれる。さらに、コレクションがほぼ全容をもって構成されるということから、人の暮らしというものが展開し得る多様な可能性をも示唆してくれるだろう。このようにコレクションは、多層的な暮らしの位相とそれを支える理念系と表徴体系から成る貴重な実例となっていると考えられた。

またコレクションの集積には、調査担当者の間でしばしば取り上げられた前提的な特徴がある。コレクションが、かなり意識的に保持されてきたということである。たとえば、意図的に遺そうとした主なものに新聞とチラシがある。太平洋戦争が始まった1941（昭和16）年12月8日から、彼女は、世の中の動きが如実にわかるからという理由で、新聞を遺し始めた。1945（昭和20）年8月15日で一端打ち切ろうとするが、翌日の新聞の変わり身の早さにびっくりして、これも大事な記録であると遺し続け、結局、新聞用紙に酸性紙が使われているため10年ももたないと知って、昭和の最後で止めることにした（大村1993:170）。遺された新聞は、菩提寺の岐阜県山県市小倉町の東光寺に、今も保存されている（2005年現在³⁾。また廃棄するような‘ちびた’下駄も、大切な暮らしの記録なのだからということで遺された（大村1999:295）。つまり壊れたものや部分的なものなども遺されているのである。遺された理由には、将来使うかもしれないということもあったかもしれない。しかし概ね、これらのことから、コレクションの集積には、そのままではもはや使わないものや使えなくなったものをあえて遺すという意図的な営みが反映しているといえる。

但し彼女は、ものを遺すために特別な暮らし方をしたわけではない。着物の場合でいえば、着なくなったものの使える部分を生かして袋物にしたり、素材が錦紗のものを人形作りの友人に提供したりして、使えるものは最後まで使い切ろうとした。このように、ものをしまつに使うということは、『しまつとぜいたくの間』（大村1993）という著述に見るように彼女のかなり明瞭な主張となっている。また脳梗塞になって、それまでの和装生活を洋装生活に切り変えてから、彼女は、身近で世話になっている人々に、生前贈与と言う形でそれらの着物を惜しげもなく贈った。そのためコレクションには、元気な頃の彼女の姿を印象づけていた和服の主なものは含まれていない。こういったことも暮らしの必然的な営みの結果であるといっておく。

要するに彼女は、ものを意図的に遺そうとしたけれども、遺すための暮らし方をしたわけではない。そのためコレクションには、普通ならば捨てられるものなども含めて、暮らしの跡を留めるものが丁寧に遺されたといっておく。

4 3つの側面のものの価値

ところで調査の前提は、先述したようにものと人間との関係性を問うことである。この点をめぐって、共同研究会では、どのような基本的な視座をあらかじめ想定したのかについて触れておきたい。我々の暮らしの世界は、もの自体に対応する抽象的な体系として捉えられるわけで、人間化したものの体系についても、仮説的にその分節化した位相が提案できる。人間化したものは、①用に立つという側面 ②暮らしの意味に結びついていく、「思い入れ」のような実在的側面、言い換えれば生きられるものともいえる側面 ③知覚の対象として、直感的な理解に基づく表現的な側面、の3つの側面から捉えることが可能である。言い換えれば、整合的な技術の体系としてのもの自体が、不整合な実生活に如何にとけ込んでいるのかについて、機能と意味と感動の位相からそれぞれ捉えられるのではないかということ、われわれは仮説的に共有したのである。以下では、その点について、もう少し具体的に述べておきたい。

ものは、まず暮らしに役立つ実用的なものとして、あるいは実用的な機能が期待されるものとして捉えられる。大村しげが著書の中でしばしば取り上げる「おくどさん」は、湯を沸かしたり煮炊きをしたりするとき、薪のような燃料のみならず、包み紙やかまぼこ板のようなゴミと見紛うものも利用することができる。さらに、できた灰は藍染めの浴衣を洗濯したり、乾物を戻したりする上で有効利用できる。というように、彼女にとって、「おくどさん」は無駄のない便利な設備であった。ところが防火上の理由で、消防署から使用が禁じられてしまう。また大小の「ささら」は、まな板や中華鍋を洗うのに、スポンジでは手の届かない部分もさっぱり洗える道具として、彼女によって終生使われた。が、ささらは、現代生活では、いつでも、どこでも入手できる日用品ではなくなった。むしろ生活史的遺産のような存在になりつつある。

さらに「おくどさん」は、弱火の調節が容易なため長時間かけて煮豆などをするのに適い、そのため、煮物の匂いをいつも漂わせていた。その側にはいつも母親の姿があったのであり、「おくどさん」は合理的な調理に適うのみならず、家族への思い出とも重なるものだった。ここで指摘されるものの実用性は、省力化や空間の有効利用、防火上の配慮を優先するというような現代生活とは、必ずしも相容れない。が、大村家の暮らしの生態的な営みのなかで、その実用的価値が生き生きと描き出されている。

このように見てくると、ものと関わる実生活や生活史的な意味を帯びた暮らしの中の実用性の特徴が、コレクションからかなり実証的に捉えられるように思われる。

さらに「おくどさん」は、「京風の通り庭にあって、なべ釜から、おろし金、すりこ木まで、親の代から使っているものばかりやから、私が買いかえたのはいかきぐらいである。」(大村 1987: 75) というように、両親から受け継がれたもののひとつである。また上述のように、ゆったりと長時間を掛けて、おまめさんやコンブがたかれ、

そこからは食べ物の匂いが常に漂っていた。ここでは、おくどさんや古い道具に、両親の姿や暮らしぶりが重なり、感情移入されていることが示される。「おくどさん」や古い道具が存在する理由は、役に立つことだけではなく、そこにあること自体に上述のような別の必然性や由来があることが注目できる。彼女は、それらの道具や仕掛けを通して、父母とのコミュニケーションを温め、父母の暮らし振りに浸ることができる。ものは、コミュニケーションの仕掛けになっているといえるだろう。

またさらに「おくどさんを使うていたころ、大きいおなべに水を張って、ひとくべするだけで、どんどんお湯が沸いた。折り箱でもかまぼこの板でも、不要なものは何でも燃やしてしまうので、家の中もよう片づいたし、お湯もふんだんに使えるのでありがたかった。その後初めて湯沸かし器を取り付けたときは、なんやらガスを無駄遣いしているように思えた。なんせ、それまでは、ほかすものでお湯が沸いていたのやから。」(大村 1997: 8) と、都市ガスに比較して、おくどさんの実用性の高さや経済的合理性、さらにゴミも片づくということで、一種の首尾一貫した決まりの付き方に、倫理的で、かつ一種の美的感情の発露が認められる。さらにここには、都市ガスの普及が、日常生活を着実に社会経済システムの中に組み入れていったことも示唆されている。後に彼女の若い仲間たちが、半身不随になった彼女のことを思いやって、ガスファンヒーターを設置したとき、彼女はそれがお湯一つ沸かないことを知って、思わず不用だと口にしてしまい、「世の中、便利になっているのか、不便になっているのか、さっぱりわからない」(大村 1993: 80-81)と書いた。また使わなくなった「おくどさん」は、「無用の長物でさえある。それでもわたしは、おくどさんの上に神棚があって、そこに備えてある荒神松を毎月お朔日に取り替えるという暮らしを、大事にしたいのである」(大村 1997: 7-8) という。これらのことを考え合わせると、大村しげの「おくどさん」という装置や火に対する信仰のような感情も知ることができる。最後に急いで付け加えると、ナカノマに常時あった長火鉢も、暖房を兼ねながらお茶を沸かすという実用的機能はもはや使われないものの、終生、取り除くことなく遺された「主婦の座」を象徴する仕掛けであった。

これらの装置は、家族の暮らしぶりや思い出と重なるものである。ものに連なる人物や思い出が、彼女にとっては、暮らしと気分の落ち着きを得るうえで重要だった。ここには、暮していくうえで張り巡らされたコミュニケーションの網が、ものや装置に重ね合わせて理解されることが示される。

なお、大村しげの著作は、コレクションに関連する多くの言説を提供し、これらについて考察する上で有効な資料になっている。

さらにものには、その形態や色、素材、大きさや重さなどのように、感覚に直接訴える側面がある。たとえば、大村家の走り(通り庭)の写真を見ると、縦線と横線で仕切られた矩形の重なった空間構成となっており、その相似的な形の組み合わせは、

外観的な好みの問題と同時に、伝統的な設計上のモジュールの原則をも想起させる。これらは、ものの機能や意味とも関係づけられながら、表層的な印象や気分を形成し、われわれの現実感覚と分かちがたく結びついているにちがいない。

矩形の空間構成には、彼女の個人の好みや感性が反映していると同時に、それらは明治・大正の地域の暮らしを継承したものである。ここには、彼女が生きた時代や地域の人々に共有される、感じ方や好みや感性の在り方が見て取れる。また木や竹や天然繊維、焼き物といった自然素材を生かしたものは、もの作りの技術や使用方法が一目見ただけでもわかりやすいし、独自の素材感をもっている。但しコレクションには、20世紀の工業生産物に不可欠な化学合成素材、いわゆるプラスチックが入り込んでおり、この混ざり合った素材が紡ぎだす生活景観は、独自の印象を形成しているに違いない。

またものの重さや形態には、傾向性がある。手で持ち、直接唇に触れる食器——たとえば湯飲み茶碗や汁碗には、より軽く、適切な薄手のものであることが要求される。さらにまた、畳まれた衣服の形態とサイズには一定の法則性があり、それとその衣服を収納する包みとしての風呂敷やタンス類の大きさには関連があり、タンスを収納する押入や空間のサイズとも関連する。こうした「入れ子構造」の関係が、伝統的な住まいとものの収納との間にあることが、すでに一部報告されている（川崎 2003）が、このような他と連動するものの大きさに関する視点は、衣服と収納との関連だけでなく、多くの包まれたものと包み方や包むための袋や器具、それらを置くためのスペースや家具との相互の関連のなかで、興味深い意味を示唆するものと思われる。

以上のように、大村しげという個人のものにおける多様な傾向性が、多角的に分節化され、機能的・物質的な側面から、多様な表徴体系の重なりまでが予想された。そのため、本調査とその分析を推進する上で、多角的な視座が必要かつ可能であると思われ、共同研究は、異なる専門分野の研究者の参加によって構成された。それにともなって、共同研究の実を上げる上で必要とする大まかな視座の統一をどうするのかということが、終始課題として横たわっていた。この点に関して再度確認しておきたいことは、調査の前提には、あらかじめ証明すべき20世紀という時代像や生活像があるわけではなく、稀有な事例としてのものの悉皆調査を通して、生活文化と時代が示されるべき対象として立ち上げられ、その上で具体的な課題が如何に設定できるのが課題となるという基本的立場が確認された。その意味で、調査を完了した現在、コレクションを拠り所とする本格的な研究については、実は今から始まるのだということ、再度申し上げておきたい。

なお共同研究会での報告を通じて、多方面の多くの研究者から貴重な提言をいただいた。共同研究員以外の研究者の報告をここに記し、感謝の意を表したい。

〈丹波生活衣〉から見えてくること	奥村萬亀子氏
衣服の歴史人類学に向けて	徳井 淑子氏
「もの生態学」の方法と課題, その成果	疋田 正博氏
京都の町家の暮らし	杉本 歌子氏
公団住宅2DKにおける生活再現から	青木 俊也氏
昭和の暮らし博物館における暮らしの四季	小泉 和子氏
大阪における近世町屋と生活道具	谷 直樹氏
考現学に描かれた生活具と人々の居場所について	黒石いずみ氏
個人の地域意識と観光化	朝岡 康二氏

5 本書の構成

本報告では、悉皆調査ということから必然的に生じたデータの猥雑さのために、分析する上で困難を極めながらも、調査の過程で発掘された問題提起に基づいて具体的な課題が模索された。また調査データに触発される一方で、各分担者の問題意識から生起する関心の側面から提起された課題もある。後者の取り組みは、本研究にとって次の段階のあり方を示すものでもある。基本的・仮説的な展望が、どのように展開されたかについて、詳しくは、本書所収のそれぞれの論考を参照されたい。

ここでは目次に従って、本書の全体的な構成上の意図について触れ、収録された報告や論考の位置づけを簡単に述べておきたい。

本書の構成は、共同研究の目的に従って、まずⅡ. ではコレクション調査の概容を、Ⅲ. ではコレクション調査を拠り所として、元の所有者、大村しげの生活様式と人生や価値意識を再現・理解することに関する論考をまとめた。最後にⅣ. では、コレクションに含まれた彼女の全著作物を一覧し、物書き、大村しげの全体像を提示することにつとめた。

Ⅱ. では、調査に基づいて、3つの側面からコレクションの内容について報告されている。まずコレクション収集の経緯に関して報告する。次にコレクションに含まれるものの周辺の事情、元の所有者の生涯との関係など、さらに主として用途に注目した調査方法と、調査結果としての全品の内容構成をまとめている。最後にコレクションに含まれる基本的で特徴的なものを、衣料品・収納用具・信仰関係資料・執筆に関わるものに注目して、具体的に概観している。

まず笹原亮二による「1. 所有物全品収集」では、当コレクションの収集の経緯や資料の特徴、個人の生活に関わる全品調査資料の活用をめぐる課題についての見解が述べられている。当コレクションの収集は、今和次郎による「所有物全品調査」に収

集の想を得て実施されたが、その経緯と実際の収集作業の状況が具体的に記されており、ものの生活現場における在り処に関する状況などが報告されている。

次に筆者は、「2. 大村しげコレクションのものの周辺」において、京都市中京の住まいに、元の所有者が住み始めてから生涯を終えるまでに蓄積されたものを通時的に5期に分け、それぞれの時期において蓄積されたと考えられるものの大まかな把握を試みることで、コレクションの内容を概観している。「3. 調査の方法」では、ものの調査の実際の作業やOCMによる分類やその他の情報の記録の仕方を解説している。OCMとは、「Outline of Cultural Materials」の略であり、もともと文化要素を機能によって分類するための目録で、取り上げられたすべての文化要素にコード番号が付けられている。「4. 大村しげコレクションの内容構成」では、OCMによるものの用途分類によって、コレクションの全容の数量的な偏りの特徴を明らかにした。「5. 特徴的なモノの概要」では、大村しげが執筆した文章にも取り上げられる衣類、信仰関連資料と、物書きの暮らしに関連する執筆に関連したものや執筆したものを取り上げた。なお彼女の執筆したものには、「おぼんざい」を核にした執筆が多くあるが、これらに関連した道具類の概要については、別に報告された論考に譲っている。さらに収納することを目的とした多様な家具道具類や仕掛が、少なからず含まれることから、ものの空間的な位置関係を示唆するものとして、収納の装置について概観している。各項目毎の概容解説を通して、コレクションのものが、大村しげ及び父母の、京都という地域と時代に根ざした暮らし方や、物書きとしての大村しげの暮らしを濃厚に留めたものであることが示唆されている。

Ⅲ. では、調査の過程で発掘された問題提起に基づく具体的な課題を扱う10本の論考を取めている。ものから文化を読むという基本的課題に関する論考1本のほか、大村しげの生活全般にわたる内容が取り上げられており、彼女の暮らしを再現することが目指されている。即ち、居住環境に関する論考3本、「おぼんざい」の実態に関する論考2本、衣生活に関する論考2本、物書きとしての大村しげに関わる論考2本という内容構成である。

まず「1. ことばとモノ」(笹原亮二)は、ことばとモノとの多様な関わりを検討することで、モノから生活文化を探求するための基本的な方法を模索・提案している。ことばとモノは必ずしも直線的に結びついているわけではない。このことを基本に踏まえ、従来行われてきた民俗学におけるモノ研究、民具研究の流れを整理し、大村しげコレクションを実際の事例として視野に納めつつ、モノを通しての生活文化研究の可能性を、その方法論や資料論の構築に注目して精力的に検討する。この報告は、共同研究にとっての基本的な課題に与するものであり、やや長文にわたるが紹介しておく。

モノとことばの錯綜した関係は、膨大なモノ研究・民具研究のなかで多様な視点から考察されてきた。まず民具調査の現場では、研究者の関心はモノの呼称や使用の側面とモノに関する話・ことばの世界の側面の2点に集約できるとし、その上で、民具の呼称即ちモノの呼称が、民俗事象の調査・整理・分類のための単なる指標に留まらず、それが指し示す民俗事象の内容と生活文化・歴史資料としての有効性を併せ持つことを指摘する。

モノの名称は、その命名や造語に注目した場合、命名法やモノに対する認識や社会的な役割が知られるのみならず、創造的な活動としても捉えられ、名称は、モノの社会的・文化的機能を探るための重要な手がかりになる。モノと話の関係もまた、説明される対象と説明の内容といった単純な対応関係として理解されるものではなく、調査における「談話」という双方向的な関係がモノの認識の仕方に複雑に絡んでいる。さらに切実な実用としての機能に留まらぬ付加価値的な側面が無視できない。そして話・ことばの世界とモノとの関係には、祭りにおける象徴的な事物のように、モノが何か観念を生み出し固定化させるのみならず、それに突き動かされて再び造形を変化させるという双方向的な関係も認められ、そのことは、話すことが話し手の過去に対する意識や歴史認識と本来的に通底するという性格と無関係ではないことに由来することなどが指摘される。

こうしたモノとことばの錯綜した関係は、モノを対象として調査や研究を行う場合の資料批判として欠かすことができない重要な作業であり、それは大村しげコレクションの場合にも有効であると提言する。とりわけ故人となっている大村しげの場合、文筆家としての著作における言説と遺されたモノとの関係を探る上で重要な切口になる。さらに、ことばにおける口頭表現と文字表現の差異をも踏まえた検討が必要なことを検証している。同時に、こうした検討が、今後の大村しげコレクションの調査研究においても、課題であることを提案する。

「2. 大村しげの都心居住」(角野幸博)では、大村しげの著述や聞き書きから立ち上がる彼女の独自の暮らし方を主な手掛かりにして、高度経済成長期から安定成長期の京都市内の社会状況と照らし合わせながら、大村しげの都心居住像について探っている。大村しげが住んだ京都という町の変化、町家の変容、彼女の近所づきあい、次々と随筆を発表した拠点としての長屋暮らし、高齢化に伴ってバリ島に転居することで迎えた都心居住の終焉、という各時期における大村しげ独自の暮らし方を再現し、都心居住について考察する。

「3. 大村しげのこだわり——ものの収納場所と収納用具から——」(筆者)は、すでに現場を離れていたコレクションの調査データを整理することによって、ものの在り場所と収納用具およびその中身のものを再現することを試みる。その結果、ものを仕切り、在り場所を支えている収納の仕掛によって、もののまとまり方に傾向がある

ことを指摘する。たとえば、使用頻度によって収納場所・収納用具が区別される、和風のものや洋風のは分けて収納される、日常と非日常のもの、公のものと私的なものは仕分けられている、等々。個々のモノが収納される際、こうした規則性があることが指摘される。さらに、こうした個別のものの置き場所が集積することで、大村しげ独自の、各部屋のアイデンティティのようなものが考察できるとする。

「4. 大村しげの「おぼんざい」を支えた台所と台所道具——生活技術と社会技術のはざまに——」（山口昌伴）では、まず「おぼんざい」をめぐる、ジャーナリズムによって社会化された「おぼんざい」と、それとは別の大村しげが保とうとした“本当の”「おぼんざい」とのギャップを指摘する。山口は、大村しげ自身、意味を取り違えられて「おぼんざいといえば大村しげ」といわれるようになった、その桎梏をきらって日本を脱出し、バリ島住まいに至ったという理解に立ち、その上で、ふたつの「おぼんざい」の間のギャップを知る有効な手掛かりとして、大村しげの台所と台所道具に注目する。解体して運び込まれた生活道具から直感的に読みとれる生活行為の痕跡と主のいない「はしりもと（流し元）」の寸法や空間的な位置関係と、大村しげ著『ほっこり 京暮らし』（大村 1997）から読み取った内容を関連させて、大村しげの「おぼんざい」のねらいと主張を導き出している。仕出し屋を営んだ父親が築いた台所の空間構成は、19世紀日本型台所を特異に継承したもので、この台所と少なからぬ道具立てが、大村しげの「おぼんざい」を支えるノウハウとオピニオンを具現するハードの備えであったという。そして20世紀の日本における食べるシステムの進展に対する反旗として、観光ブランド化を本意としない、大村しげの「おぼんざい」に懸けた狙いがあったのだと指摘する。

「5. 「おぼんざい」の思想」（大塚 滋）は、「おぼんざい」そのものと、それに対する大村しげの考えについて取り上げる。前者については、幕末に遡る「おぼんざい」の由来、大村しげの関連著作の内容、それらに取り上げられている「おぼんざい」の素材及び料理法を明らかにすることで、「おぼんざい」そのものを考察する。と同時に、大村しげのしまつとぜいたくという、身についた思想が「おぼんざい」に認められるとする。

「6. 大村しげと「おぼんざい」」（藤井龍彦）は、大村しげの「おぼんざい」について、5. とは別の角度から検証する。主に彼女によって「書かれたモノ」を参照し、彼女が「おぼんざい」をどう考えていたのか、また「おぼんざい」という言葉が日本各地で使われるようになった経緯について考察している。

「7. 大村しげ寄贈品における女物と装履物についての報告」（磯 映美）は、大村しげが脳梗塞で倒れた1994（平成6）年以前に入手し使用された和装履物38件を使用痕の有無、使用と未使用の区別、贈答品としての熨斗紙の有無、おおよその流通年代の推定、使い方（＝履き方）、購入の仕方など、モノに関する情報の側面から詳し

く観察・記録し、和装履物の用い方や維持管理の特徴について考察する。

「8. 大村しげコレクションに見る“着物リフォーム”——12点のワンピースから——」(林 八千木)は、大村しげが遺した和服地から仕立てられた12点のワンピースの素材、デザイン、縫製、製作者、製作年代などを調査し、さらに採寸などによって製図に起こすことで、「着物リフォーム」におけるものの実態を明らかにする。また最近の着物リフォームとの関連や、衣服や布に対する大村しげの考えを探っている。

「9. 書かれたモノ、遺されたモノ」(相川佳予子)は、大村しげの著作の内、秋山十三子・平山千鶴との共著『京の着倒れ』(大村 1975)と『京の手づくり』(大村 1980)を主な手掛かりとして、文章によって書かれたものへのこだわりと実際のコレクションの中で観察される相応のものについて、所見や関連情報が紹介される。さらに東京の「昭和のくらし博物館」と比較することで、戦争とその後を訪れた高度経済成長期以前の暮らしを留めたものが、両者に共通して見られることなどを具体的に指摘する。

「10. 大村しげの思想——文筆活動の軌跡と民博収蔵品——」(森 理恵)は、物書きとしての大村しげのキャリアの変化とその間に書かれた著作に現れた思想の変遷について、収蔵品を参照しながら考察する。主に『婦人朝日』と『私の作文』、『ひととき』の投稿時代から、京都発信の文筆業時代、バリ島発信の文筆業時代への変遷と生涯の文筆活動を貫いた思想を抽出する。そこには、京都からの発信、弱者からの発信、生活史への注目、自分の立場を明瞭にするという生涯をつらぬく思想が確かめられるという。また、そこには周縁の位置からものを書き、発信するという一貫した姿勢が見られるが、文筆家として社会の勝者になったとき、思想の変化がうかがわれるとも指摘されている。

以上の10本の論考によって、主に大村しげの日常的な暮らしと物書きとしての暮らしの再現を試みているが、詳しくは、本書所収のそれぞれの論考を参照されたい。

最後に、巻末に収録するIV. 資料 大村しげ執筆記録について、簡単に触れておきたい。

大村しげの全執筆記録のうち印刷物になったものは、1952(昭和27)年(33歳)から、没後の2002(平成14)年までの47年間にわたってみられ、合計652件にのぼる。そのうち、没後(1999年3月以後)に印刷され、出版されたものは7件である。なお執筆記録には、印刷されなかった学校時代の手書きの作文も1点含まれる。

執筆したものの概容については、別に「5. 特徴的なモノの概容」で報告しているため、ここでは触れない。

注

1) 商品科学研究所+CDI 1980『生活財生態学——現代家庭のモノとひと』では、家庭機能と

して「就寝・食事・調理・着衣・家事・衛生・団欒・養育・趣味・接客・外出・管理・収納」の13機能を設定し、各機能に対応する道具立てとしての「生活財」によって充当されているとした。なお「生活財」は、生活していく上で必要とする、大小にわたるすべてのものを指す用語として使われている。さらにこれらの生活財が、より完備されることで家庭機能を充足させる内在化の方向と、逆に放出することで家庭機能を外在化させていく方向があり、生活を支える生活財の在り方は、両者のバランスの上で均衡が保たれているという仮説をたてた。と同時に、これらの生活財が家庭景観美意識を形成していると指摘する。本報告においても、生活財の概念とその検討方法について参考にした。

- 2) 個々の生活財についてデータ化を実施した調査に、朝倉敏夫・佐藤浩司編『図録 2002年ソウルスタイル』(朝倉・佐藤 2002) の場合が知られるが、他に類似の報告は見当たらない。
- 3) 2007年初頭の調査によって、昨2006年に、大村しげから預かっていた約40年間分の新聞を処分したことが判明しており、本書の出版時(2006年度末)には、この新聞の収積は存在していない。

文 献

秋山十三子・大村しげ・平山千鶴

1975 『京の着だおれ』 京都：東洋文化社。

朝倉敏夫・佐藤浩司編

2002 『図録2002年ソウルスタイル』 大阪：千里文化財団。

大村しげ

1980 『京の手づくり』 東京：講談社。

1987 『京暮らし』 東京：暮らしの手帖社。

1993 『しまつとぜいたくの間』 東京：佼成出版社。

1997 『ほっこり京暮らし』 京都：淡交社。

1999 『京都・バリ島車椅子往来』 東京：中央公論新社。

川崎裕子

2003 「衣服の収納」『衣と風俗の一〇〇年』 東京：ドメス出版。